慈濟大學100學年度
碩士班暨在職專班招生考試命題紙

科目：日本學術能力　　共1頁

（日本語か中国語で答えなさい）

一、「万葉集」、「源氏物語」、「平家物語」の中から一つ選んで述べなさい。

二、夏目漱石、芥川龍之介、志賀直哉の中から一人の作家を選んでその文学について述べなさい。

三、日中、日台文学（文化）の比較研究について考えたことを書きなさい。

四、次の文章を読んで、要旨をまとめなさい。

自然主義は、フランスのゾラやフロベールの文学に大きく影響を受けた思想で、人間の新の姿を書くのが文学、という考え方だが、日本の自然主義は、ゾラやフロベールのそれとは少し別のものに育っていった。つまりは作者の真実をどんどん掘り下げて書く、という方向に流れたのである。すなわち、あたかも告白小説のようになっていったのだ。

考えてみれば、明治後期のこの頃には、日常的に文学を楽しもうという教養ある階層はそんなに多くなかった。それは数少ない大学生など、一部の人々だったのだ。そして、小説家になろうという人は、ほとんど大学を出ている、一握りのエリートだった。そういうエリートが、自分のことを赤裸々に掘り下げて告白するかのように書けば、真実に迫っており、文学だ、という一種のありがた味のようなものがあったのだ。

大学生たちは、学識ある作家が自分を大いに見つめ、愛欲の苦悩、家庭内の不和や、傲慢や劣等感などをつつみ隠さず告白するのを読んで、これぞ人間の真実だ、文学的とはこういうことなんだと憧れたのだ。その結果、文学は物語性をほとんど持ちえず、ただ個人的な苦悩の告白であるばかりになった。

自分のことを赤裸々に告白すれば文学的だ、という奇妙な思い込みが、このように日本文学の中に芽生えてしまったのは、本当は悲しむべきことだったかもしれない。個々の作家たちの情熱は真面目なものだったが、自分個人からスタートして、人間の普遍にまで達するのが文学だ、という視点が欠けていたのである。

この自然主義文学が、私小説という日本に特有の文学傾向につながっていくわけだ。作家という選ばれた人が、自分のことをありのままに語るのが文学だという、かなりいびつな文学観ができてしまうのである。